

私は牧師である主人から、これまでに数回、同じ聖書を贈られている。その中でも、特に大切に読み込んでいる一冊について語ってみたい。

最初に主人から頂いたのは、私が洗礼を受けた記念に贈られたごく普通の聖書だった。それを読み続けていたが、数年後、主人と結婚して2年目の結婚記念日を迎えた時のこと、私たちは毎年この日に贈り物をプレゼントし合う習慣があり、主人が「大型版の革装聖書が欲しい」と言ったので、私はそれを快く了承し、彼のために聖書を買って贈ることになった。

ところが、問題は私への贈り物だった。主人が知る限りでは、結婚記念には男性から女性へは白の革装聖書を贈る習慣があると聞いていた。しかしその頃には、もう白の革装聖書は販売されていなかった。

そこで私たちは話し合うことにした。私は主人が持っていた中型の黒い革装聖書を見て、「この聖書はどうするの？」と尋ねた。それは、彼が日々読み込んでいたものだった。

私はふと思い立ち、「その聖書を、私へのプレゼントにしてくれないかな」と提案した。主人は少し驚きながらも、理由を尋ねてくれた。私はこのように答えた。「あなたは神様に祈りながら、この聖書をたくさん読んできたのを知っているよ。だから、私もあなたが読んでいた聖書を読んで、あなたと祈りを共にしたい」。

その言葉に、戸惑いながらも主人はうなずき、私の願いを受け入れてくれた。こうして私たちは、2年目の結婚記念日に互いに聖書を贈り合ったのだった。

今では毎日、主人から贈られたその聖書を読んでいる。彼は黄色の蛍光ペンで大切な箇所には線を引く人なので、ページのあちこちにその印がある。私はその線を見ながら「同じところが大切だと感じたんだ」と思い、同じ神様への信仰を持てることに心が温かくなる。時には私も同じ箇所を大切だと感じることもあり、その上から、オレンジ色のペンでそっとなぞることもある。

彼がどのみことばを大切にしていたのかが、ページをめくるたびに伝わってくる。だからその聖書は、私にとって学びの書でもあり、祈りの書でもある。こぼしたコーヒーの染みや、折れたページの跡もたくさんあるが、そこに味わい深いものがある。

この、ただの読み古された一冊が、私にとっては世界に唯一の宝物だ。いつも枕元に置いて、今日も明日もまたその聖書で『神様のラブレター』を読み続けていく。